川下の風景⑭
～人生は川の流れのように～

米津　達也

【親と子の憂鬱】

18 歳で東京に出た娘のひとり暮らしも何とか 1 年を越えた。仕事と自分のやりたいことの折り合いが上手くいかず、今もその途上で悩み葛藤しながら明日を生きることに必死だ。家賃や生活費を考えれば働き続けなければならないから、鬱々と自宅に籠っているわけにもいかない。仕事が全てではないが、生活の基軸として存在するなかで、常に生活を回していかなければならない。日常の生活を生きるという大変さと逞しさを感じるのは親の贔屓目だろう。そんな娘が某テーマパークのアトラクションで働いていたが、今の職場を離れて、別のところで働きたいと決めた。そんな連絡を受け、一度は娘の働いている姿を見に行こうと仕事のやりくりを行ったが、肝心の娘からは反応が無い。仕事を掛け持ちしているので、そちらが忙しいのだろうと思っていたが、先日、妻を通じてこんな返事が来た。そのアトラクションの仕事、実はひと月前に辞めていて、何故かそれを親に伝えそびれたとのことだった。要は、“言えなかった”のだ。申し訳ない、心配を掛けるから、何となく、どんな感情で彼女が伝えられなかったのかと思うと、逆にこちらが申し訳ないと思ってしまう。対人援助は対象の理解が全てだと偉そうに喋っていても、結局、理解できることは僅かで、そもそも理解しようという姿勢がそこにあったのかと、反省から憂鬱な気分をもたげている。

【植えられなかった稲たち】

代々続いた地主の一族。滋賀の片田舎ではまだまだそんな一族の話を聞く機会がある。自宅の家系図を遡ればどこに行きつくのか興味津々だが、当事者たちにとっては埃の被った骨董品扱いかも知れない。本家があり、男兄弟がそれぞれ土地を分け与えられ、そこに家を建てて集落を形成する。分家が分家を生み、○○さんという表札はあちこちに点在する。だが、高度経済成長期以降、核家族化が進み、代々受け継いだ土地が順当に引き継がれる世の中でも無い。娘は嫁に行き、嫁いだ先で同じように介護問題を抱えて実家の世話が出来ない。長男は高校卒業と同時に早々に都会に出て、大学生活を謳歌しながらそこで家族を形成して帰ってくる気配もない。残された末っ子が土地の管理と引き換えに老いた親の世話をしているが、田舎では農業や林業など兼業家業が中心となった今ではいろいろ面倒なことも背負わなければいけない。この親子もそんなライフステージを迎え、90 歳に手が届く老親たちはいよいよ今年の田植えが難しくなってきた。長年の付き合いである農協からは、例年の通り稲が届く。老親たちは昨年、末っ子に相談もなく新しい田植え機を購入。使い慣れた機器なら何とかなったかも知れないが、オートメーション化された新しい機器を老親たちが使いこなせるはずもなく、結局は末っ子に押し付けるような形になっているが、もちろん彼はそれをやるつもりもない。老親たちは嘆く。このまま放っておいたら折角の稲がダメになる。なんとか息子に田植えをお願い出来ないだろうか。ある意味、勝手な親の憂

鬱は身近な援助者に届いても、肝心の末っ子には届かない。稲は徐々に生長しながらそこに実りをもたらすことはなく、新調された田植え機は納屋でその役割を果たすことはない。

【変化の時間軸】

周囲の援助者は思うようだ。末っ子がちゃんと老親の面倒もみて、田植えのことも協力してあげれば良いのに。長年の農作業で腰の曲がった老親たちを見ているとやるせなさも募ることだろう。しかし、この親子に共有される時間軸がない。時代はこの 30 年で親子を隔てる時間と価値を大きく変えてしまった。土地や家業を代々継ぐことよりも、別の資産として運用する方が孫たちの負担や利益を考えれば有益だと考えるのも無理はない。豪奢な仏壇や墓がステータスとして家族の中心に据わる時代ではない。

せめてもっと親子で話し合えばよかったのに。それも外野からすれば思うことだろうが、“言えない”家族文化を継いできたのは何より老親たちでもある。ゆくゆく、自分たちが出来なくなったら子どもたちにお願いしたい。そんな解決を見据えた対話が存在し得なかったことは、一度も使われることのなかった田植え機を見ていると分かる。そんなことすら老親たちは相談しなかったし、計画性をもたなかったとも言える。

今はまだ老親たちは生活を何とか維持できる能力を持っている。しかし、90 にも手が届く歳だ。元気で長生きも良いが、生物である限りそれが 5 年先に約束されたものではない。人は当たり前のように老いて、多くが病になり、死を迎える。そして、身近な家族もそれに倣って変化せざるを得ない。外野でいる援助者にとって、それは危機を感じるものであるかも知れないが、自然の流れと言える。介護保険制度は 24 年の歴史しかない。だが、老親の介護というライフステージは遠い昔から存在し、戦後の資本主義化と共に長寿化、核家族化が新たな問題を形成してはいるが、介護における変化という時間軸は変わっていない。タイムパラドックスではないが、あまりその時間の流れに逆らわない方が良い。

2024.5.21　米津達也